

小学校高学年における「書くこと」の困難さに関する考察 — 5年生児童のアルファベット習得に焦点を当てて —

Difficulties with Writing in the Upper Elementary School Grades
— Focusing on the Fifth-Grade Students' Acquisition of the Alphabet —

油 布 茂 子
Shigeko YUFU

要旨

本研究の目的は、児童のアルファベットの習得状況及びアルファベット習得に対しどのような困難さを感じているのかをテストやアンケートを通して明らかにすることである。国立教育大学附属小学校5年生児童を対象に、アルファベットの名称を聞いて、大文字・小文字を書き取っていくテストを行い、アルファベットを書くことに関わっての困難さについてのアンケートを実施した。テストの結果、大文字小文字の習得について、小文字の習得がより難しいことが明らかとなり、どのような文字の習得が難しいのか、誤答には傾向があることが分かった。誤答の分析やアンケートの結果からも、児童が間違える文字と困難さを感じる文字には共通性が見られた。児童が、アルファベットを一つ一つ識別し、正しく書けるようになるためには、各文字の特徴を掴み、形を覚え、他の文字と混同しないようにする、という何重もの「難しさ」が存在することが明らかとなった。

キーワード：小学校外国語、書くこと、アルファベット、誤答分析

1. はじめに

学習指導要領（文部科学省, 2017）の改定を受けて、2020年度から高学年に「読むこと」、「書くこと」を加えた外国語科が導入された。2011年度から高学年において外国語活動が導入され、その充実により、児童の高い学習意欲が認められているが、一方では、音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない（文部科学省, 2018）などの課題が挙げられており、とりわけ「書くこと」に関しては、指導上の課題が指摘されてきている。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説（文部科学省, 2018）の第2節英語目標（5）の「書くこと」では、「小学校の外国語科の『書くこと』の目標ア『大文字, 小文字を活字体で書くことができるようにする。また, 語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする』及びイ『自分のことや身近で簡単な事柄について, 例文を参考に, 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする』を受け, 語句や表現を書き写したり, 例文を参考に自分のことなどについて書いたりすることができるだけでなく、『関心のある事柄』について, 伝えたい内容を正確な英語で書くことができる力に身につけさせること」と述べられており、中学校での学習は小学校でのアルファベットの習得が

前提となっている。

筆者は2023年度現在、国立教育大学附属小学校にて外国語の授業を担当している。高学年の「書くこと」の領域では、「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。」（文部科学省、2017）とされている。しかしながら、授業内で児童の「書く力」を見た場合、この目標に全ての児童が到達しているとは言い難いのが現状である。児童はアルファベットを書けるようになることに、どのような難しさを感じ、何がその習得に困難さを与えているのか。実態とその問題点を検証し、課題を明確化していきたい。

2. 先行研究

アレン玉井（2006, p.72）は、アルファベットを正しく書けるようになることが、単語を処理し、記憶するために必要であるとし、英語入門期におけるアルファベットを正しく書ける能力の重要性を述べている。だが、入門期での「書く力」の養成には大いに難しさがあることは、複数の研究者らが指摘している。

川井・栄利・鈴木（2020, p.52）は、ワークシートを用いて行った「書く活動」についての報告の中で、「4割程度の児童は書くことに難しさを覚え、6割の児童は書く活動よりも歌やゲーム等の方が英語を覚えやすいと回答した。児童の個人差も大きい時期であり、段階を踏んだ無理のない指導が必要である」と述べている。松本・大友（2021, p.127）は、文字指導教材を作成、公立小学校3年生への指導を行った。その中で、「特に外国語活動・外国語科においてアルファベットの文字習得の個人差は大きい。文字の認識が十分でないまま高学年になれば、学習したことの確認も難しいし、発表活動など非常に困難となるであろう。」と述べ、アルファベット習得が一律に達成できることの難しさ、そのことが高学年以降の外国語学習に大きく影響することを示唆している。

辻（2023, p.9）は、小学校高学年でのアルファベット習得の成果を見定めるべく、中学校に進学して間もない1年生を対象に英語の文字の名称を聞いて大文字と小文字を書き取る調査を実施している。その結果、「大文字の習得に課題を抱えている生徒は1割、小文字については2割」という調査結果を報告し、中学入学後に学び直しの必要性のある生徒が2割にものぼることを指摘している。

このように、小学校での「書く力」の養成の困難さの実態について焦点の当たった先行研究は複数見られたが、著者の知る限りでは、実際に児童がどの文字について困難さを感じているか、どのような指導があれば、その難しさを児童から取り除くことができるのかについて、研究の焦点を当てたものは見当たらなかった。

小学校高学年という英語学習の入門期における「書く力」、アルファベットを正しく書ける力の養成は、その後の児童・生徒のスムーズな英語学習のためには不可欠であると言える。ただし、それは一筋縄ではいかず、習得の速さ、確かさも個人差が大きく、指導者はアルファベット習得について、児童の感じる難しさがどのような点にあるのかというところに大いに配慮しながら、学習内容の定着をはからなければならない。

以上の点からも、アルファベット習得について、どのような点に児童が困難さを感じるかを明らかにすることが必要である。

3. 方法

小学校5年生を対象に、アルファベットの書き取りテスト及びアルファベットを書くことに関わっての困難さについてのアンケートを実施する。テストの解答を分析し、どの文字の習得が難しいのかを明らかにし、アンケートではアルファベットを書くことに對し児童がどのように考え、書くことのどこに難しさを感じているのかを分析する。テスト・アンケート共に、質的及び量的に分析する。

3.1. 研究の目的

「アルファベットを習得する」という課題について、何故、どのように難しいのかを明確化していくことで、今後、児童ができるだけアルファベットの習得がスムーズにできるよう、より適切で効果的な教材や指導方法を開発していきたいと考える。

本研究の目的は、5年生の児童が、アルファベットの大文字・小文字を書くことについて、どの程度正しく書くことができるのか、また、どのような間違いをするのか、そして習得に関わって、どのような困難さがあるのかを、テストやアンケートを通して明らかにすることである。

3.2. 参加者

参加者は国立大学附属のA小学校に通う5年生合計80名（男子40名、女子40名）である。参加者は、中学年において12時間程度のローマ字指導の授業を受けている。

3.3. 調査時期

2023年12月に行った。

3.4. 調査の内容

3.4.1 テスト（資料1を参照）

アルファベットをいわゆる「名前読み」で教師（筆者）がランダムに読み上げ、児童は所定の用紙の解答欄に大文字と小文字を書き取っていく。それぞれの文字の読み上げは3回ずつ行う。参加児童が4線上に書くことにまだ慣れていないため、今回のテストでは解答欄には4線を引いていない。調査実施前には、調査の目的やデータの活用について伝え、調査結果は成績等には一切関係のないこと、情報を適切に扱うこと等の説明を行った。

3.4.2 アンケート

二つの問いをした。一つ目は、児童に「特にむずかしい文字を5つ選んでください」と問い、五つの文字とその理由を以下の選択肢から選んでもらい（複数回答可）、さらに自由記述解答欄も設けた。（選択肢: ①アルファベットを書くこと自体が難しい ②形を覚えることがむずかしい ③書き順が分からない ④大文字小文字と違う形なのでややこしい ⑤アルファベットの読み方と文字の形がいつちしない ⑥その他）

二つ目は「アルファベットを書くのは好きですか」と問い「はい/いいえ」の二択の回答を求めた。

「はい」と回答した場合は、その理由を以下の選択肢から選び（複数回答可）、自由記述解答欄も設けた（選択肢: ①書くこと自体が好き ②形を覚えることが好き ③書き順が面白い ④外国の言葉なので興味がある ⑤その他）。「いいえ」と答えた場合には、選択肢はあえて用意せず、きらいの理由について自由に述べてもらった。

4. 調査の結果

調査は「3.4.1テスト」で示した方法で実施したが、読み上げた際に、児童より十分に声が聞き取れ取れなかった、再度読んでほしい、などの要望があった場合に限り、それに応じて4回読み上げたケースもあった。

誤答結果の表分析（表1, 2, 3, 4, 5, 9, 10, 11）については、辻（2023）の方法を参考にした。

4.1. テストの正答率

アルファベットの文字を聞き、すべての文字を間違いなく書き取ることができた児童は17名で、参加者の20%であった。

4.2. テストの誤答について

4.2.1 誤答文字数

次に大文字小文字別に、誤答文字数別の人数と誤答者総数における割合を示す。

表1 大文字・小文字別 誤答文字数別の人数と誤答者総数（n=80）

誤答文字数	誤答者数（割合）			
	大文字		小文字	
5文字以内	70名	87.50%	56名	70.00%
6-13文字	9名	11.25%	17名	21.25%
14文字以上	1名	1.25%	7名	8.75%

4.2.2 各文字別の誤答率

大文字と小文字の誤答率を以下の表に示す。文字は誤答率の高い順に並べている（表2-5）。

表2 大文字の誤答率（％）順（n=80）

I	43.75%	Y	6.25%
J	37.50%	P	5.00%
N	15.00%	D	2.50%
M	13.75%	S	2.50%
L	11.25%	U	2.50%
F	10.00%	Z	2.50%
R	10.00%	T	1.25%
V	7.50%	A	0.00%
E	6.25%	B	0.00%
G	6.25%	C	0.00%
H	6.25%	K	0.00%
Q	6.25%	O	0.00%
W	6.25%	X	0.00%

表3 小文字の誤答率（％）順（n=80）

q	47.50%	p	17.50%
l	45.00%	u	17.50%
j	42.50%	i	16.25%
d	30.00%	w	11.25%
g	30.00%	v	8.75%
n	28.75%	t	6.25%
f	26.25%	a	5.00%
m	26.25%	s	3.75%
r	26.25%	z	3.75%
y	22.50%	k	1.25%
b	21.25%	c	0.00%
h	21.25%	o	0.00%
e	18.75%	x	0.00%

4.2.3 各文字の無答率

無答について、率の高い順に、大文字小文字とそれぞれ以下の表に表した（表4-5）。

表4 大文字の誤答率（％）順（n=80）

N	10.00%	P	3.75%
J	7.50%	D	2.50%
R	7.50%	Z	2.50%
F	6.25%	E	1.25%
H	6.25%	S	1.25%
I	6.25%	T	1.25%
L	6.25%	A	0.00%
V	6.25%	B	0.00%
W	6.25%	C	0.00%
Y	6.25%	K	0.00%
Q	5.00%	O	0.00%
G	3.75%	U	0.00%
M	3.75%	X	0.00%

表5 小文字の誤答率（％）順（n=80）

q	17.50%	i	6.25%
r	17.50%	v	6.25%
n	15.00%	b	5.00%
g	13.75%	e	5.00%
l	13.75%	s	2.50%
f	12.50%	t	2.50%
h	12.50%	z	2.50%
p	12.50%	k	1.25%
m	11.25%	u	1.25%
w	11.25%	a	0.00%
d	10.00%	c	0.00%
j	10.00%	o	0.00%
y	7.50%	x	0.00%

4.3. アンケート結果

アンケートの結果、一つ目の問いについて、児童がどの文字を苦手として5つ選んだか、そしてその理由について表6にまとめた。「⑥その他」については、「鏡文字」についての記述が特に多く、「⑥鏡文字」「⑥その他」と分けた。どの文字が苦手で、どの選択肢を理由として回答していたかは、表7-8にまとめた。

二つ目の「アルファベットを書くのは好きですか。」の問いには、「はい」との回答が56、「いいえ」

が23、無回答が1であった。「はい」の理由を以下の選択肢から選んでもらい（複数回答可）（選択肢：①書くこと自体が好き ②形を覚えることが好き ③書き順がおもしろい ④外国の言葉なので興味がある⑤その他）、回答数は、①23 ②17 ③9 ④33 ⑤20であった。⑤では児童は好きな理由を自由に述べた。「いいえ」を選んだ児童23人は全員きれいな理由を自由に述べた。

表6 苦手な文字の理由

	大文字総数	小文字総数
① アルファベットを書くこと自体がむずかしい	15	10
② 形を覚えることがむずかしい	14	65
③ 書き順がわからない	4	4
④ 大文字小文字と違う形なのでややこしい	9	44
⑤ アルファベットの読み方と文字の形がいつちしない	5	12
⑥ 鏡文字	2	39
⑥ その他	0	5
合計	61	179

表7 苦手な大文字（上位から）

文字（回答数）	①	②	③	④	⑤	⑥鏡文字	⑥その他
M (7)	1	1	1	2	1	1	
G (5)	2	2	1				
W (5)	1	2	1	1			
F (4)	1	2		1			
J (4)	1	1		1		1	
N (4)	1	1		1	1		
F (4)	1	2		1			
I (4)	1	2			1		
Y (2)			1	1			
H (2)		1			1		
L (2)				1	1		
B (1)	1						
R (1)	1						
S (1)	1						
Z (1)	1						
K (1)	1						
D (1)	1						

表8 苦手な小文字（上位から）

	①	②	③	④	⑤	⑥鏡文字	⑦その他
q (36)		14	1	9	2	9	1
d (30)	1	12		6	1	10	
p (29)	2	2	1	3	4	10	2
b (28)		8		6	2	10	2
f (12)	1	6	1	4			
g (12)	2	7		3			
a (6)	1	5					
r (5)	1	2		2			
h (5)		1		3	1		
j (5)		3	1		1		
y (4)		1		3			
m (3)		1		2			
k (2)				2			
n (2)				1	1		
w (2)	1	1					
c (1)	1						
t (1)		1					
e (1)		1					

5. 分析

5.1. 誤答カテゴリー

調査の結果、どのような文字が間違えやすいのか、つまり習得が難しいのか、誤答には傾向があることが、数字より分かった。誤答をカテゴリーごとに類別し、一つずつ検証していきたい。本研究では、辻（2023）の研究の誤答カテゴリーを参考にしながら、「無答」「鏡文字」「大文字の縮小」「発音および形の混同」「形の不完全」「その他」で分類、本稿では「無答」、「鏡文字」（「類似形の鏡文字」を除く）、「大文字の縮小」「発音および形の混同」「形の不完全」「その他」で分類、それに加えて「類似形の鏡文字」「類似形の誤答」「小文字の拡大」も分析項目に加えた。「j」の鏡文字の誤答が相当数見られたが、同じ鏡文字でも、「b・d」、「p・q」は他の文字との混同という視点からも分析したく、「b・d」、「p・q」については「類似形の鏡文字」の誤答として分析する。「h・n」、「t・f」のように、形が似ていることにより誤答となるケースも多くみられた。「類似形の誤答」として分析したい。「大文字の縮小」はよくある誤答で、そのまま本研究の分析項目にも加えたが、逆の「小文字の拡大」もいくつか見られたため、分析項目に加えた。

表9 誤答カテゴリー別の件数（大文字）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
無答	0	0	0	2	1	5	3	5	5	6	0	5	3	8	0	3	4	6	1	1	0	5	5	0	5	2	75
鏡文字	0	0	0	0	0	1	0	0	0	21	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	23
小文字の拡大	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
発音と形の混同	0	0	0	0	4	1	1	0	0	0	0	3	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
形の不完全	0	0	0	0	0	0	0	0	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26
その他	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	2	1	0	1	0	1	0	0	2	1	0	0	0	0	11
類似形の鏡文字	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
類似形の誤答	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
総数	0	0	0	2	5	8	5	5	35	30	0	9	11	12	0	4	5	8	2	1	2	6	5	0	5	2	162

表10 誤答カテゴリー別の件数（小文字）

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
無答	0	4	0	8	4	10	11	10	5	8	1	11	9	12	0	10	14	14	2	2	1	5	9	0	6	2	158
鏡文字	2	0	0	0	1	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	24
大文字の縮小	0	1	0	8	5	4	11	5	2	5	0	21	8	7	0	0	21	5	0	3	11	1	0	0	12	1	131
発音と形の混同	0	0	0	1	5	1	2	0	0	0	0	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
形の不完全	1	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
その他	1	1	0	1	0	1	0	1	3	1	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	1	1	0	0	0	0	15
類似形の鏡文字	0	10	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
類似形の誤答	0	1	0	1	0	4	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	14
総数	4	17	0	24	15	21	24	17	13	34	1	36	21	23	0	14	38	21	3	5	14	7	9	0	18	3	382

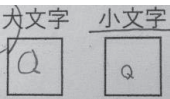
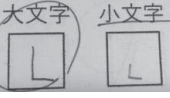
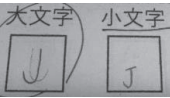
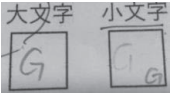
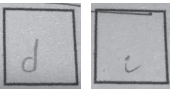
5.1.1 誤答カテゴリ別の件数及び実例

誤答カテゴリ別の件数を大文字小文字に分けて表にまとめた（表9-10）。各カテゴリ別誤答例も、大文字小文字別に実例と共に表にまとめた（表11-12）。

表11 大文字の誤答例

誤答文字	誤答例	誤答カテゴリと内容（人数）
I		⑥ 形の不完全（上下の横棒が無い）（26）
		④ 小文字の拡大（3）
J		② 鏡文字（21）
		④ 小文字の拡大（2）
N		⑤ 発音と形の混同（Mとの混同）（2）
M		⑤ 発音と形の混同（Nとの混同）（3）
		④ 小文字の拡大（1）
		その他（Nと発音の混同、さらにNを鏡文字としている例）（1）
L		⑤ 発音と形の混同（N、Mとの混同）（3）
		
F		② 鏡文字（1）
		⑤ 発音と形の混同（Nとの混同）（1）
		⑧ 類似形の誤答（1） （F→f→tを辿っていると推測される）
R		⑧ 類似形の誤答（Pとの混同）（1）

表12 小文字の誤答例

誤答文字	誤答例	誤答カテゴリーと内容（人数）
q		③ 大文字の縮小（21）
		⑧ 類似形の誤答（3） （注1：下方誤答は、左側に丸みを持つ「d」との混同で、丸み右側の縦棒を上突き出すのか、下に突き出すのか、その識別が難しかった結果の誤答と推測する。6.1.3 誤答カテゴリー⑦で更に詳しく検証する。）
		
l		③ 大文字の縮小（21）
		⑤ 発音と形の混同（2）
j		② 鏡文字（20）
		③ 大文字の縮小（5）
d		⑦ 類似形の鏡文字（6）
		⑤ 発音と形の混同（pとの混同）（1）
g		③ 大文字の縮小（11）
		⑤ 発音と形の混同（d, jとの混同）（2）

n		⑤ 発音と形の混同 (2)
f		⑧ 類似形の誤答 (4)
		⑥ 形の不完全(1)
m		⑤ 発音と形の混同 (2)
b		⑦ 類似形の鏡文字 (11)
h		⑧ 類似形の誤答 (1) h → b
e		③ 大文字の縮小 (5)
		⑤ 発音と形の混同 (5)
		② 鏡文字 (1)
p		⑦ 類似形の鏡文字 (3)
		⑥ 形の不完全(1)
i		⑥ 形の不完全(3)
		その他 (Hとiの順番の混同)
t		③ 大文字の縮小 (3)

5.1.2 誤答カテゴリー別の分析

続いて誤答カテゴリー別に誤答の特徴等について分析する。

①無答

アルファベットの文字の名称を聞いて、書けなかった、という回答である。大文字の無答は75、小文字は158で、一番多い誤答カテゴリーとなった。無答の要因はいくつか考えられるが、単にアルファベットの知識が習得できていないことが大きな要因と考える。

②鏡文字

「J」の大文字・小文字の誤答の大部分は、鏡文字であった。アレン玉井（2006）が「Jについては日本語からの干渉ではないかと考えられる」と述べているように、ひらがなの「し」の影響が考えられる。他にもかなり少数ではあるが、「a」、「F」、「S,s」の鏡文字があった。「u」「M」について、上下反転の状態で書いているケース（「u→n」、「M→W」）が1つずつあった。通常、左右反転を鏡文字という。左右反転と上下反転は原因が違うのではないかと推測されるが、利き手やその他の子どもの特性による、いわゆる鏡文字（基本左右反転）と、それ以外の鏡文字（単に左右反転、上下反転したときに同じ形になる文字の混同など）があるかもしれない。このことについては、さらに研究が必要と思われる。

③大文字の縮小

正しくは大文字とは違う形の小文字であるのに、「c,o,s,v,w,x,z」のようにただ大文字を縮小した、という誤答である。小文字の誤答では131あり、無答に続く多い誤答である。誤答が多かったのは、「q」21、「l」21、「y」12、「g」11であるが、特に「q」と「l」は小文字の誤答の上位1.2位で、「q」はローマ字学習で習わない文字であり、児童にとっては習得が難しい文字であるし、「l」は大文字の「I」との混同も多い。「g」も誤答順位は4位で、児童にとっては習得が難しい。すなわち、習得自体の難しい文字を、児童が大文字を単に小さくしてしまう、という誤答の出現しやすい例である。

④小文字の拡大

小文字の形をそのままの形状で大きくしている誤答である。逆の「大文字の縮小」は他の研究でも誤答カテゴリーに含まれている。児童が間違えやすい誤答内容である。表1の「誤答文字数」でもわかるように、児童にとっては大文字の方が習得率が高い。逆に言えば小文字の習得は難しい。その難しい方の小文字を元に、拡大するだけ、という誤答は、一見起こりにくそうだが、実際本調査では、7見られた。この事実から、大小合わせて52文字のアルファベットの形を識別することは児童にとって困難である、ということが見てとれる。ただ、この誤答は音についての区別はついていない上での誤答である。音の認識ができていない誤答とはまた別と考えたい。

⑤発音と形の混同

「E」「I」、「M」「N」「L」「F」、などの文字で、いわゆる「名前読み」の音が似ていることか

ら文字が混じってしまい、誤答につながっている（大小文字どちらも）。他にも「j・g」「g・d」「d・p」（発音の混同）も、一例ずつであるが、この誤答カテゴリーに含めた。

アレン玉井（2010）は、児童はアルファベット学習においてその文字を見た時に、まずその文字を視覚的に把握しようとすると言き、線を横にひくのか、または斜めにひくのか、形は左右対称か、など、その文字の「弁別特徴（distinctive features）」を掴もうとすると言う。このような視覚刺激に/eɪ/という聴覚刺激を結び付け、「A」と「/eɪ/」が同じ記号を表していると頭の中で処理し、その文字を識別する、と述べている。音の認識と形の識別など、習得までに児童にはいくつものタスクがあり、それが誤答を出現させる一因であると思われる。

⑥形の不完全

「I」に多く見られた。上下の横棒の無い形であるが、これは生活の中でよく目にする各種フォントの影響を受けていると思われる。辻（2023）はこのことについて、「小学校の文字指導時にフォントのことを児童に気付かせ、小学校や中学校ではどちらのフォントを使った方がいいのかを考えさせるように留意することが重要である。」と述べている。

「J」についても上の横棒が要るか要らないか問われる点であるが、文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室がH P上で示している「ワークシート（PDF版）」によると横棒の無い形が表されている（「J」）。

「I」については、上下の横棒が無いと、「l」、Lの小文字と混同するため、それは誤答として扱った。「J」については、そのような混同がないためどちらも正解とした。

⑦類似形の鏡文字

「b・d」「p・q」が特に多い誤答であった。著者はこの誤答については、「J」の大文字小文字共にみられる「鏡文字の誤答」とは別の誤答として考えたい。Jについては、「日本語からの干渉ではないかと考えられる」（アレン玉井, 2006）とあるように、おそらくひらがなの「し」の影響を受けて鏡文字になっていると思われるが、その文字は、アルファベットの中には存在しないものである。一方「b・d」「p・q」は鏡映の文字が実際にアルファベットの中に存在する。それは英語入門期の児童にとっては大変紛らわしいもので、加えて音素的にも「b・d」は母音が同じ（/i:/）で、「p」も「b・d」とは鏡文字関係ではないが、「形状の類似」「母音の同発音」があり、紛らわしい）、その間違いをしないうにクリアしていくことは、児童にとっては大きなタスクである。小文字誤答カテゴリー例を表した表11の「小文字q」の「類似形の誤答」内の（注1）はまさしくその例で、「q」と「d」は同じように左に丸みを持たせ、右に接する長棒を丸みより上に上げるか下に下げるか、児童にとっては、文字を書く際にそこを間違えないように識別し、暗記して書けるようになっていくということは、アルファベット習得をし終えた大人や指導者が想像する以上に、困難さを伴う学習事項である。英語入門期の児童にとって、見慣れていない文字の形を認識することは大変難しいことである。

⑧類似形の誤答

①「t・f」、②「q・g」、③「q・d」、④「h・n」などの混同が数人の解答から見られたが、本調査では4線を使用しておらず（4線を使つての授業内での指導が少なかったため）、今後4線を使つた指導をさらに進めて、各文字の特性（どこまで上下の棒を伸ばすか、上下どちらを丸めるのかなど）を区別できる力を育成することが必要と思われる。

他に見られた本カテゴリーの誤答、「RとP」などは、形と、順番の混同もあると見られる。大文字Fの解答欄に「t」を書く児童もいた。大文字のFと小文字のfが混じり、その上fとtが混じり、「t」と解答したのではないかと推測する。「l・j」の誤答も縦長の一本線の形状を真つすぐ止めるか左にはらうか、の違いである。本カテゴリーに含めた。大文字小文字の区別、他の文字との区別、と何重にも誤りが重なるケースは他にも見られるが、習得が難しくなる一因であろう。

5.2. アンケート分析

アンケートでは、児童が苦手な文字について何故苦手なのか、その理由を選んだ。大文字の苦手な順位は上から「M,G,W,F,J,N,F,I,Y,H,L」（2以上）だった。大文字については小文字よりも正答率は高く（表1より）一位の「M」は6である。そこから児童の大文字に対する苦手意識は高くないことが推測できる。小文字の苦手な順位は上から「q,d,p,b,f,g,a,r,h,j,y,m,k,n,w」（2以上）となり、一位の「q」は36という、被験者80のうちの半数近くが選ぶ結果となり、児童の「q」に対する強い苦手意識の表れが出現した。「q」の難しさにはいくつかの理由がある。まずローマ字学習では「q」は習わない。児童にとっては「馴染みの薄い」文字である。加えて「p」との鏡映関係が難しさを増大させる。鏡文字自体に対する苦手意識はアンケートの結果から読み取ることができ、「b」「d」の文字に対し、20の児童が鏡映であることを苦手な理由として選択、「p」「q」に対しては19の児童が選択しており、「b・d・p・q」に対して苦手と回答した総数は被験者の約半分となる。（苦手な文字へのアンケートの自由記述ではこの4文字に対し、「似ている文字・左右逆（鏡）の文字があるからややこしい」という内容が33あった。）

では、鏡文字に対する苦手意識を取り除けば児童がアルファベット習得に難しさを感じなくなるかといえば、そうではないことがアンケート結果から読み取れる。アンケート内の他の選択肢（複数回答可）の大文字小文字合わせた回答数を見ると、表6に示した選択肢の中で、1位は「②形を覚えることがむずかしい」が79、2位は「④大文字小文字と違う形なのでややこしい」が53で、「⑥鏡文字（が苦手）」41をしのご。

小文字の⑥その他の記述の内容も興味深く、「どこに書くかが難しい」、「書きづらい」、「形が一緒でややこしい」、「同じような文字があると分かりにくい」、「色々な形があってややこしい」などがあり、殊に「同じような文字があり分かりにくい」、「色々な形があってややこしい」という意見は、逆の記述内容のようで、主張したいことは「識別が難しい」ということである。

アンケートのもう一つの問いは、「アルファベットを書くのは好きですか？」であったが、「はい」で一番多かった理由が、「④外国の言葉なので興味がある」の33であった。顕著な意見としては、「文字の形や発音について、どうやるのか考えるのが楽しい」、「色々な形の文字があるから好き」「外国語の文字は日本語と違うから好き」「形がおもしろい、とにかく楽しい」など、外国語への児童

の好奇心に溢れた言葉が並ぶ。このような児童の前向きな意見から、どのような指導をすれば多くの児童が楽しくアルファベットを学べるのか、参考にしていきたい貴重な意見である。一方「いいえ」と回答した児童の自由記述（23）は、特に「苦手な小文字」を選んだ時の記述と似ており、「覚えにくい、発音が似ているのがあったり、大文字と小文字が全然違う」「似た文字がいっぱいある」「大文字と小文字が異なるからややこしいし、数も多い」「小文字が難しい」など、困難さを感じている記述が目立つ結果となった。苦手意識がさらに困難さを感じる要因となっていると言えるであろう。

6. 考察

この研究では次の2点を明らかにしようとした。1点目は、アルファベットの大文字・小文字を書くことについて、どの程度正しく書くことができるのか、またどのような間違いをするのか、であり、2点目は習得に関わってどのような困難さがあるのか、であった。1点目に関わっては、テストの結果、2割の児童は完答、5文字以内の誤答数の児童が大文字は9割近く、小文字は7割で、大文字についてはかなりの習得率であること、小文字については、今後指導が必要な文字もあるが、一定習得が進んでいることが分かる結果となった。先行研究（辻, 2023）の結果とも同じで、大文字の習得率は小文字の習得率を上回る。

誤答の中で一番多かったのが「無答」であり、先行研究（辻, 2023）との比較では、辻の調査での大文字の無答率上位10文字は、上から「V,N,R,Y,Z,L,M,J,F,X」、本研究では「N,J,R,F,H,I,L,V,W,Y」となり、大文字の無答率の高い順序が、上位10文字のうち、7文字同じ結果となった。同じく小文字では、辻は、「q,v,l,f,n,g,r,j,p,h」、本研究では、「q,r,n,g,l,f,h,p,m,w」と8文字が一致し、ある程度の順位相関が得られる結果となった。

無答の原因についてはいくつか考えられるが、文字の知識が未だ定着していないことや、辻（2023, p.6）は「ただ単に、英語の文字の名称を聞いて、その文字を形としてイメージできない。」「音素情報を正しく認識できず迷って無答になることも考えられる。」と述べている。他の文字と混同した末、解答できなかったことも考えられる。知識が定着するよう、丁寧な指導と児童の着実な学習が今後求められる。

「鏡文字」の誤答については、大文字「J」についての総誤答数（表9参照）のうち、70%が鏡文字の誤答で、同じく小文字「j」では59%と高い数字を示している（表10参照）。同じく総誤答数のうち、「類似形の鏡文字」でも、小文字「b」で59%、小文字「d」は21%の誤答率となり、児童の間違いやすい誤答パターンと言える。「J・j」については、「5.1.2 誤答カテゴリー別の分析」でも述べたように、ひらがなの「し」の影響は考えられる（アレン玉井, 2006）。岡本（2005, p.198）は、ひらがな学習においても出現する「鏡文字」について、図形認知の概念の元、ひらがなの「く」を例に、以下のように述べている。「鏡映文字が一例である『く』という文字は、中心で左に曲がっていることが大切であるのだが、子どもにとっては『外側に折れている』ということが大切になる。右と左よりも内側か外側かが大切なのである。」この記述をアルファベットの「鏡文字」の誤答について当てはめた場合、「J・j」なら、左右というよりは、「下部で曲げる必要がある」ということが、「b・d」なら、「長棒を書いて、下部で丸みを持たせる必要がある」ことが大切になる、と

いうことである。以上のような児童の認知能力の特性も鑑み、それぞれの文字の特徴を捉え、正しく知識が定着するような指導方法を考えていくことが必要である。

小文字における「大文字の縮小」の誤答については、上から「l,q,y,g,u,d,m,n,e,h,j,r（同数順位文字含む）」で、小文字の「無答率」の上位10文字「q,r,n,g,l,f,h,p,m,w」のうち、「l,q,g,m,n,h,r」の7文字が両誤答の上位に入るという結果が出た。このことは、これらの文字が「正しく形を覚えにくい、難しい」文字であるということを表す。何故、児童がただ文字を小さくしただけの形を解答するのかを考えてみたい。第一に考えられるのが、小文字の「c,o,s,v,w,x,z」のように、「ただ大文字を小さくするだけの小文字」の影響を受けてはいないだろうか。「無答率」、「大文字の縮小」両方の上位順位文字がほぼ同様であることを考えると、「大文字の縮小になっている文字」は、児童にとって「覚えにくい文字・習得の難しい文字」である。単に小さくなっただけの別の小文字の例があると、知識が定着していないことも手伝い、実際には大文字とは違う形を持つ小文字なのに、縮小だけして書いてしまう、という傾向はないだろうか。「大文字の縮小」の誤答が出現しやすい小文字については、指導者は、小文字というのは、ただ小さくなっている文字もあるが、それは一部で、基本的には、大文字小文字というものは別物で、違う形のもの、ただ小さくするだけでは無い文字がいくつもある、このようなことを明示的に指導することが肝要であると思われる。

「発音と形の混同」の誤答は、アルファベットのいわゆる「名前読み」の音と形の混同によるものである。音と形、二段階の理解を経て文字を認識する力が必要で、これは形だけを混同して起こる誤答よりも修正が難しいのではないかと推測される。丁寧な指導が求められる。

「類似形の誤答」については、今後4線上に書く指導をすることで、例えば「t・f」ならば、上を丸くするのか、下を丸くするのかなど、線があることが習得の助けになるのではないかと考える。「q・g」の場合も、下を伸ばすのか丸めるのか、「q・d」、「h・n」については、上下に線が伸びるかどうかなど、他の文字との識別に、4線での学習が役立つと思われる。今後のそのような指導を行い、その成果を見ていきたい。

二つ目の問いに関わっては、児童にとって、母語のひらがなではない外国語（英語）のアルファベット習得は、「文字同士が似ていて分かりにくい・ややこしい・覚えられない」、これらの言葉が表すように、習得までに幾つもの「難しさ」のハードルがあることが分かった。

色々な形のアルファベット文字の特徴を掴み、一つずつ識別し、間違わずに書けるようになることは、児童にはとても難しいことだということが、アンケートより分かった。アンケート結果で、大文字の苦手な順位は、上から「M,G,W,F,J,N,F,I,Y,H,L」（2以上）の11文字であるが、無答率の上位11文字「N,J,R,F,H,I,L,V,W,Y,Q」と8文字が同じである。小文字の苦手な順位も上からの15文字、「q,d,p,b,f,g,a,r,h,j,y,m,k,n,w」（2以上）のうち、「無答率」の上位15文字「q,r,n,g,l,f,h,p,m,w,d,j,y,i,v」と12文字が同じである。苦手な文字の理由で一番多いのは、「形を覚えることがむずかしい」、2番目に多いのは「大文字小文字と違う形なのでややこしい」であった。苦手な理由についての記述欄で目立つものは、「ややこしい」、「分かりにくい」、「難しい」という文言で、児童の感じる学習への困難さが表されている。しかし、「アルファベットを書くのは好きですか？」の問いに対して、70%の児童が「はい」と回答している。多くの児童が

選んだ好きな理由の選択項目を見ても、児童の外国語の文字への高い関心が見て取れる。児童のそのような思いが学習動機に直結するような指導が望まれる。

以上のように、アルファベットの大文字・小文字にはそれぞれの特徴があり、それを理解し、識別することは、児童にとっては相当難しいことである。それぞれの誤答の特性もよく理解したうえで、アルファベットの52文字を、児童が確実に習得できるようなきめ細やかな指導が必要である。

7. 終わりに

本研究では、筆者が関わる小学校の高学年児童のアルファベットを書く力やアルファベットを書くことについての困難さに焦点を当てた。よって、ここで明らかになったことは必ずしも一般化できるものであるとは言えない。また、結果の妥当性、信頼性を担保する上でも研究方法において改善の余地が認められる。関わって3点を以下に示す。第一に、本調査では、4線を使用せずにテストを実施した。指導の中で4線の使用が無い場面もあり、そのような形態のテストを実施したが、先行研究では4線を使った調査が主流で、比較した場合、本研究は、正確にアルファベットが書けているか、客観的判断材料が足りない側面があると思われる。第二に、一校調査で、調査対象者も一つの学年の児童に限られた点である。今後は他校の児童への調査や他学年への調査、さらにどのような指導を受けてきた児童かなども変数として加え、より多くの児童を対象とした調査を実施していく必要がある。第三に、本研究では、児童個々の特性による文字認識の差は分析していない。特定の児童が特徴的な誤りを出現させていた可能性は否定できず、今後詳細な分析が必要と思われる。

今回この調査から、児童にとって、アルファベットを習得し正しく書くということは、一つ一つの文字の違いを理解し、識別し、書けるようになるという、何重もの難しさが存在することがわかった。今回の研究や今後のさらなる発展的な研究を通じて、今後は児童のアルファベット習得により効果的な指導への示唆を導き出したい。

8. 謝辞

本研究を進めるにあたり、御指導をいただいた奈良教育大学教職大学院教授の前田康二先生、テストやアンケートの実施に御協力いただいた小学校の校長先生並びに教職員の先生方、回答してくれた5年生の児童全員に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

文部科学省「小学校学習指導要領」（平成29年告示）

文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年公示）解説 外国語活動・外国語編 開隆堂出版

岡本夏木（2005）「話しことばと書きことば」『コミュニケーション障害学』第22号, pp.195～198

川井一枝・栄利滋人・鈴木渉（2020）「小学校第6学年の児童を対象とした書く活動の報告 ―ワークシート・質問紙・観察に基づいて―」『小学校英語教育学会誌』第20巻01号pp.52～67

辻伸幸（2023）「中学校入学時における生徒が有する英語の文字習得上の課題」和歌山信愛大学教育学部紀要 第4巻 pp.1～10

松本由美・大友美奈（2021）「小学校外国語活動における文字指導教材活用の試案」玉川大学教育学部紀要 第21号 pp.113～132

アレン玉井光江（2010）『小学校英語の教育法 理論と実践』大修館書店

アレン玉井光江（2006）「小学生のアルファベット知識について」『ARCLE Review, 1 pp. 72～81』https://www.arcle.jp/research/books/data/html/data/pdf/vol_1_4_-2.pdf 2023年12月22日閲覧

（資料1）アルファベットの書き取りテスト用紙

*アルファベット 大文字・小文字を書いてください

出席番号（ ）

1 大文字 小文字 				
2 大文字 小文字 	3 大文字 小文字 	4 大文字 小文字 	5 大文字 小文字 	6 大文字 小文字
7 大文字 小文字 	8 大文字 小文字 	9 大文字 小文字 	10 大文字 小文字 	11 大文字 小文字
12 大文字 小文字 	13 大文字 小文字 	14 大文字 小文字 	15 大文字 小文字 	16 大文字 小文字
17 大文字 小文字 	18 大文字 小文字 	19 大文字 小文字 	20 大文字 小文字 	21 大文字 小文字
22 大文字 小文字 	23 大文字 小文字 	24 大文字 小文字 	25 大文字 小文字 	26 大文字 小文字